

イランミントの会リハビリプロジェクト活動報告

(イラン滞在期間 2017年9月10日～9月23日)

ミントの会顧問理学療法士
土屋辰夫

1. ベヘジシティ全国研修会での講演とワークショップ

- ・実施日 9月17日18日
- ・主催 協同組合・労働・障害福祉省ベヘジシティ
- ・会場 ヤズド市サファイアホテル内会場
- ・参加者 イラン各地域のベヘジシティ代表者などのPT、OT、ナース、ソーシャルワーカー等約120名



(講演内容)

1日目 11時30分～17時

① 「日本における脊髄損傷者の自立生活と環境設定」

日本における脊髄損傷者へのリハビリテーションの変遷と自立を支援する環境設定や社会参加の実践とバリアフリーの必要性について症例を通して説明した。日本では新たな課題としての高齢化問題があることを報告するとともにイランにおける問題について会場からの意見を求めた。

会場からは、「障害受容が難しい」「入院期間が1ヶ月くらい」などの意見が出された。

② 「障害者スポーツと社会参加」

脊髄損傷者のリハビリテーションとして普及した障害者スポーツの歴史と東京パラリンピックを紹介した。オリンピック競技種目のひとつである車椅子ラグビーは、四肢麻痺者が参加できる障害者スポーツとしてVTRを使って紹介した。ウィンタースポーツとして盛んになっているチェアスキーについても日本発祥の障害者スポーツとして紹介した。

あわせて、日本における障害者雇用促進のための制度や障害者自身が様々な形で社会にむけて情報発信を行っている例も紹介した。

③ 「福祉用具の活用・リハビリテーションの視点」

福祉機器を導入する際に必要なリハビリテーションの視点と日本における用具の開発と普及の方法について紹介した。

福祉用具を通じて障害者の自立を支援する考え方について、具体例を写真や動画で紹介しながら説明した。開発と普及の方法として多職種参加の学術集会や福祉機器展覧会を紹介した。イランでも同様の取り組みがあるとの事であった。

講演の合間に地元テレビ局から取材を受けた。



2 日目

① 「日本におけるバリアフリー住宅改修」

日本の一般的な住宅事情とバリアフリーにするための住宅改修の方法について説明した。特に、玄関の出入りやトイレや浴室等でおこなわれている具体的な工夫を写真や動画を用いて解説した。

② 「高齢者を支える日本の制度」 担当：土屋まさみ（別資料）

③ ワークショップ 「住宅改修の実際」

講演に引き続き、グループワークによる住宅改修の事例検討を行った。「歩行困難な片麻痺患者が自立して日常生活を送るための改修プランを考える」というものであり、活発な討議と発表が行われた。



2. ケラジ市内障害者団体主催研修会における講演会

- ・実施日 9月20日
- ・主催 NGO 障害者活動グループ「ナセリ」
- ・会場
- ・参加者 ケラジ市内の脊髄損傷者などの障害者とその家族など 100名
 - ① 褥瘡の予防と管理 (担当：大澤)
 - ② 脊髄損傷者の排泄支援 (担当：秋山)
 - ③ 障害者スポーツと社会参加 (担当：土屋辰夫)

障害者スポーツの歴史と東京パラリンピックを紹介した。オリンピック競技種目のひとつである車椅子ラグビーとチェアスキーVTR を使って紹介した。また、日本における障害者雇用促進のための制度や障害者自身が様々な形で社会にむけて情報発信を行っている例も紹介した。

講演後には会場から質問や意見が出され活発な討議があった。また、終了後には個別の相談が数多くあり、時間的に対応しきれなかったものについては翌日に訪問して対応することとなった。



3. 個別リハビリテーション相談・治療・指導（土屋辰夫対応ケース）

① 両下腿多発骨折 テヘラン在住の 58 歳男性

エレベータ転落による外傷後遺症。数回の手術を受けて退院し、T 杖を使えば屋外を 500m ほど歩けるまでに回復したとのことであった。しかしながら、右足部に変形と可動域制限があり歩行時に疼痛があるとの事であった。

疼痛緩和と機能改善のための運動プログラムを指導し、足部への負担軽減を目的として足底板を調整し供与した。ご本人からは、「楽に歩ける」とのコメントがあり、他覚的にも跛行の軽減が確認できた。

「手術の適応はあるか」との質問に対しては、現在は炎症が残っている状態なので、しばらくは様子を見た方がよいと説明した。

② 頰椎症 35 歳男性

(初回)

ケラジ市職員で頰部の痛みと右上肢に痛みやしびれなどの神経症状があった。MRI の所見では C2 および C6 付近に椎間板ヘルニアがあり、仕事が忙しくなりパソコンに向かっている時間が長くなると症状が増悪するとのこと。

右頭頰部への徒手療法を実施したところ症状の軽減がみられたので、自分でできる予防的なストレッチや歩行などの運動プログラムを指導した。

(2 回目)

前回の治療により症状の改善があったとのことで、2 日後に再び来られた。今回は、「字を書くことが困難」という新たな相談もあった。原因はやはり頰椎症からくる尺側の手指の疼痛としびれによるものと思われた。抜本的な対応策は見いだせなかったが、前回と同様の徒手療法による症状の改善を確認したうえで運動プログラムの継続を促した。

③ 腰椎症 38 歳 女性

5 日前から急性の腰痛症状が出ているとのこと。コルセットを装着しても歩行が困難な状態で来られた。前日にハードなエクササイズしてから痛くなり動けなくなったとのこと。2 年前からコルセットはときどき装着している。

右仙腸関節および第 5 腰椎付近に疼痛あり、右側下肢後面のしびれ感と膝の痛みおよび伸展制限あった。リラクゼーションと軽微なマニュアルセラピーを実施したうえで、予防的な運動プログラムを指導した。自覚的には「楽になった」との事であった。後日、日本から持参した消炎シップ剤を渡した。

④ 腰痛症 32 歳 男性

6 カ月ほど前から長く座った後に右下肢が痛み、歩行困難になるとのこと。腰部や股関節にあきらかな機能障害はなく、坐骨神経にも伸長痛はなかった。

現時点では手術の必要はないと思われることを伝え、予防としてのストレッチとして「うつ伏せ上体起こしを 10 回」などを指導した。ハードなエクササイズの後にはクールダウンをすることも勧めた。(以上)